ま　え　が　き

本書は，アジア経済研究所平成17年度から18年度にかけて２年間行われた「開発問題と福祉問題の相互接近――障害を中心に」研究会の成果である。同研究会は，開発途上国研究機関であるアジア経済研究所で初めての途上国地域の障害者および障害についての研究会である。本研究の背後にある長い間あたためられていた問題意識として，途上国の障害者の問題は，障害者福祉の専門家のみに任せておいてよい問題ではなく，途上国専門家，また開発専門家もともに取り組むべき問題であるということがある。

そうしたなか，本書の総論で述べられているような，障害についての社会科学の立場からのアカデミックな研究枠組みである障害学の枠組みが用意されたこと，MDGs（ミレニアム開発目標）を背景に世界的な貧困削減への取り組みが，多くの援助機関，政府機関で取り組まれるようになったことが，本研究会の発足を力強く促進することとなった。貧困削減のためには，貧困者のなかに多くみられる障害者の問題についての深い理解と認識がなくては，真に実効ある処方箋を描くことはできない。すなわち，本書の研究課題は，まさに時宜にかなって，求められている研究だということができる。なお，いうまでもないが，こうした問題の啓蒙と同問題と途上国研究との橋渡しをしてきた多くの関係者の努力もその背景にあることも忘れてはならない。

国際社会福祉の立場からの途上国の障害者へのアプローチや障害関係NGOの人たちを対象としたイントロダクション的な本は従来もあった。これらは障害をもった人たちが途上国でどのように困難を抱えているかといったことや，支援のあり方を中心に議論していた。本書はこれらに加え，途上国のなかでの障害者の生活状況，また先進国にいるあるいは途上国にいる障害専門家といった支援者ではなく，障害当事者からの視線や当事者と政府・

制度・社会のかかわりに焦点を当てることを特色としている。また障害を個人的な問題ではなく，障害学でいう社会モデルという観点からとらえ，障害者を障害者たらしめている社会としての途上国にも焦点を当てようとしている。そうしたアプローチを採用している「障害と開発」をうたった研究書としては，わが国最初といってもよい研究書であろう。本書がなるにあたっては，本書執筆者の各委員の皆さんからの積極的な議論，特に委員の皆さんが障害当事者や障害当事者を伴侶にもつ，また障害当事者とともに活動をしてきている立場で貴重な経験や先進的な研究の紹介等をしてくださったことが本書の内容の深まりに貢献できたのではないかと思う。

研究会では，本書執筆にあたった委員のほかにも，平成17年度には九州大学大学院の内藤順子さんに『チリにおけるCBRをめぐる諸問題――国際医療協力の現場から――』，琉球大学の高嶺豊教授に『アジア太平洋地域における障害と開発問題：障害者の自助グループ構築への取り組み』という題で，それぞれ研究会の場で貴重なご報告を頂き，研究会の議論の深まりにおおいに寄与して頂いた。このほか，佐藤寛アジア経済研究所研究支援部長，重富真一アジア経済研究所主任研究員，宇佐見耕一アジア経済研究所主任研究員，牧野久美子アジア経済研究所副主任研究員，久保公二アジア経済研究所研究員の皆さんには研究会にご参加頂き，途上国地域研究，また社会開発や社会福祉制度研究の立場からそれぞれのご研究の経験をご披露頂いた。これらの皆さんには，まだ新しい分野である当研究会への今後の指針を与えて頂いた。また，本研究会に関連して実施した海外共同研究では，中国社会科学院法学研究所および中国障害者連合会のご協力を頂いた。このほか，研究会では日本でもトップクラスの手話通訳の方々においで頂き，大変に難しい議論を通訳して頂いた。ろうという障害当事者でもある編者との議論の深まりは，こうした方々の支援なくして実現しえなかった。これらのすべての方々にこの場をお借りして御礼申し上げたい。

最後に研究書内部・外部の匿名の査読者の方々からも貴重なコメントを頂戴し，最終原稿に向けての取りまとめでおおいに参考にさせて頂いた。こう

した皆様のご協力に厚く御礼申し上げたい。本書が日本の今後の途上国の障害者問題への新しいアプローチの先駆け，また今後の議論の土台となることを深く祈念してやまない。読者の諸兄諸姉からの忌憚のないご意見・ご批判を期待したい。

2007年９月

編者